

戦時下ソ連のジャズと大衆歌謡 における「声」

—— スターリン体制下のジャズと大衆歌謡（4） ——

鈴木 正 美

ジャズに対する論評

ソビエト・ジャズはマーチ、ワルツ、シャンソン、タンゴ、ロマ音楽、クレズマーなどの様々な音楽スタイルを独自に、そして貪欲に消化・吸収した。ジャズの音楽家や歌手たちはステージ・パフォーマンスによってナショナル・アイデンティティとしてのロシア・イメージを無意識のうちに演出し、大衆の心をとらえた。1930年代のダンス・ブームはさらにジャズと大衆歌謡の流行に拍車をかけた。特に西側からの影響もあって、ワルツとタンゴの人気が高かった。踊るための曲として最適だったからである。階層を問わず、ホテルのレストラン、ボールルーム、町の文化施設やクラブで老若男女が踊った。⁽¹⁾ラジオやレコードから流れる「声」とダンスによって日常生活においてすべての人々が幸福であるという感覚が聴取者に身体化させられていった。

大衆レベルでジャズは常に流行歌やダンスと共にある娯楽であり、あるいは軽演劇であった。ジャズはあくまでもエストラダの一種として享受された。だからこそ、かえって高尚な「芸術」のように弾圧されることは少なかった。それでは、こうしたソビエト・ジャズに対する公式的論評はどのようなものであったろうか。

革命前にはサーカスや演劇などを含めたエストラダを取り扱う専門誌が10誌近くもあり、ネップ期以降も「ソビエトのエストラダとサーカス」「映画と舞台」といった雑誌があった。ジャズに関しては風俗として捉える批評家ばかりで、そうした人物の一人が批評家、劇作家のルナチャルスキーだった。彼は

1929年までに12年間教育人民委員としてプロレタリア文化の育成に努めたが、エストラダを偏向的な芸術とみなし、ジャズも高く評価していない。「ジャズ音楽について」(1927)で彼はこう書いている。「私はアメリカのいいジャズ・バンドを聞いた、そしてそれらがとても機知に富んでいることを発見した。しかし、それらをずっと続けて聞いているとひどくうんざりさせられるのだ。ジャズ・バンドがシンフォニー・オーケストラに取って代わるなどと考えることは、恐ろしいことだ」。(2)

1930年代のエストラダ・ジャズに対するさまざまな論評に共通しているのは、西欧のブルジョア音楽ではあるが、人々を楽しませ、元気づける音楽であるということだ。そうした中で、演劇・音楽学者として著名なイヴァン・ソレルチンスキイ(1902-1944)は「労働者と劇場」誌(1933)に掲載された「ジャズについて数言」という小論で、当時流行していたジャズを、その歴史がサックスの発明から始まり、タンゴやフォックストロットの伴奏音楽としてヨーロッパで流行し、ソビエトではミュージック・ホールや映画で演奏されるようになった歴史的事実をふまえた上で、そのユーモラスで陽気なステージゆえに「低俗な」ジャンルとみなされていると指摘しているが、ジャズの特徴を音楽的に評価し、次のように述べている。「ジャズはディレクタントイズムがきらいだ。その妙技は、ジャズを定義づける特徴の一つである。ジャズを演奏する人々の高度な技術についてのみ語りえる。それゆえ好事家向けの、リズムのふらふらする、技術的にあまり価値のないジャズはすべて一掃しなければならない。残れるのは本当にしっかりしたグループだけである」。(3)

エストラダの一種という位置づけゆえに、ほとんど娯楽音楽としか認められず、一部の識者に高く評価されるだけで、その後もソビエトのジャズは紆余曲折を経ながら発展していく。そして、大衆のための音楽であるジャズは第二次世界大戦当時もその親しみやすさから人々を勇気づけ、また愛国心を支える機能を果たすのである。

国策としての歌

1930年代から40年代はじめ、悲恋ものの歌がジャズ・オーケストラをバックにたくさん歌われた。大衆もそうした歌に自分の愛の物語を重ね合わせて、歌を口ずさんだのである。一方、映画では愛国心をあおる「祖国の歌」(1935)や「スポーツマン・マーチ」(1936)等の国策的な歌が次々とつくられ、うたわれ、ヒットした。映画とエストラダは大衆の心をとらえ、こうして国民意識は強化されたのである。

国策的な歌としてもっとも有名なものをいくつか見てみよう。まず、映画「トラクター運転手」(1938)の挿入歌「3人の戦車兵」である。「国境に黒雲が暗く立ちこめる／過酷な地は静寂に包まれている／アムール河の高い岸辺に／祖国の歩哨が立っている／そこに敵への頑丈な防壁を建てた／その地は厳しく勇敢で強力／そこ極東のタイガには／射撃突撃大隊がいるのだ […]」⁽⁴⁾

ドミトリイ・ポクラス(1899-1975)とダニイル・ポクラス(1905-1954)のポクラス兄弟の作曲、ボリス・ラスキン(1914-1983)の作詞によるこの歌はノモンハン事件の前年、張鼓峰事件の年につくられた。日ソ間の国境紛争を描いている。国境を越えてくる日本軍をソ連軍の戦車が迎え撃ち、最後には「圧倒的な鉄と火力で／サムライたちは地に倒れる」。歌詞も曲も陽気で勇ましく、軍隊で好んで歌われた。

同じポクラス兄弟の作曲で、ヴァシーリイ・レーベジェフ＝クマチ(1898-1949)の作詞による「もしも明日戦争が起これば」(1938)は、ソ連に迫ろうとするドイツ軍の脅威に備え、祖国防衛を訴える歌である。

もしも明日戦争が起これば　もしも敵が攻撃してきたら
 もしも闇の力が突然襲ってきたら
 全ソビエト人民が一心同体となって
 自由な祖国のために立ち上がる！

* 陸に 空に 海に

我らのメロディーは強く厳しく
もしも明日戦争が起これば もしも明日行軍となれば
今日は行軍に備えよ
もしも明日戦争が起これば もしも明日行軍となれば
今日は行軍に備えよ

もしも明日戦争が起これば 国が動き出す
クロンシュタットからウラジオストックまで
偉大なる力強き国が動き出す
そして我らは敵を手ひどく打ち砕く

* (くりかえし)⁽⁵⁾

同名の映画の挿入歌としてつくられた歌で、歌詞は6番まであり、飛行機、戦車、戦艦等の装備を進め、いつでも戦いに行けるようにと繰り返す。国民の防衛意識の向上を狙ってつくられたこの歌は、あまりにも有名になったためか、実際に独ソ戦が始まった1941年に、同じレーベジェフ＝クマチは「聖なる戦い」を書いて、これもまた有名になった。「立ち上がれ 巨大な国よ／立ち上がれ 死の闘いに／ファシストの闇の力に／呪わしい敵の大群に／／気高き激怒を／／波のごとく煮えたぎらせろ——／／人民の戦争／／聖なる戦いが行われるのだ [...]」⁽⁶⁾ 作曲家、軍人でソ連国家を作曲したアレクサンドル・アレクサンドロフ (1883-1946) による作曲である。1941年6月26日にアレクサンドロフが芸術監督を務めていたアレクサンドロフ・アンサンブル (赤軍所属の合唱団・演奏団。1928年創設) により初演され、以後、同団体の重要なレパートリーの一つとなっており、今なお歌われているほど、ソ連人の身体に染み込んだ歌である。

ラブソングの中の「戦争」

戦時色が濃くなるにつれ、国策的な歌や軍歌が増えていく一方で、ラブソング系の歌の中にも戦争の物語が組み込まれていき、愛は常に戦いとともにあるという内容に変化していく。それらの中でももっとも有名なのが「カチューシャ」(1938)だろう。国立ジャズ・オーケストラのリーダーだった作曲家のマトヴェイ・ブランテル(1903-1990)が自分のオーケストラのために、ミハイル・イサコフスキイ(1900-1973)に作詞を依頼したところ、イサコフスキイはその場で自作の詩をそらんじた。それが「カチューシャ」で、歌詞をメモしながら、ブランテルの頭にはすぐにメロディーが浮かんだという。そのときには2番までしか歌詞はなかったのだが、戦時色が濃くなる時勢を反映して、祖国防衛のためのメッセージを盛り込むために、さらに3、4番を付け加えようということになった⁽⁷⁾。

リンゴとナシの花が咲き
川面に霧は漂う
岸辺に立つカチューシャ
高くけわしい岸辺

岸辺に立つと歌は流れる
草原の灰青色の鷺の歌
大好きなものごと
大切にしまっている手紙のこと

ああ きみ 歌よ 娘の歌
明るい太陽を追って きみよ跳べ
遠い国境地帯の戦場に
カチューシャからの返事よ届け

純朴な娘を彼は思い出す
彼女の歌が聞こえてくる
彼は祖国の大地を大切に
カチューシャの愛を忘れない⁽⁸⁾

日本では関鑑子訳の「りんごの花ほころび／川面にかすみたち／君なき里にも／春はしのびよりぬ」で「カチューシャ」はあたかもロシア民謡のように思われているが、実際はソビエト歌謡であり、国境警備の青年が故郷の娘を思い出してうたっている歌である。初演は1938年11月21日で、ブランテルとヴィクトル・クヌシェヴィツキイ（1906-1972）の率いるジャズ・オーケストラの演奏をバックにヴァレンチーナ・バチシェヴァが歌った。この初演は好評を博し、アンコールに応じて3回も演奏された。軽快なジャズ歌謡だった「カチューシャ」はその後、ゲオルギイ・ヴィノグラードフ（1908-1980）をはじめ多くの歌手が歌って大流行した。リディヤ・ルスラーノヴァ（1900-1973）の歌では民謡風にアレンジされ、特に人気が高かった。ステレオタイプ化されたロシア民謡風アレンジとルスラーノヴァのいかにも「ロシア的」衣装と見ぶりは1930年代半ばから始まったフォーク・リヴァイヴァルから生まれたものであり、戦時中は多くの民謡風アンサンブル・グループが前線でコンサートを行い、人気を博した。⁽⁹⁾ リンゴ、ナシ、草原、灰青色の鷺、あるいはどこにでもいる娘の名前「エカテリーナ」の愛称「カチューシャ」——イサコフスキイが意識的に選んだこれらの言葉も聴衆のナショナル・アイデンティティにすぐに馴染むものだった。⁽¹⁰⁾ 花咲く春のイメージは愛の象徴でもあり、同時に平和な母国、国家すべてを象徴している。個人的な恋愛が公の祖国愛と同一化していく⁽¹¹⁾。

愛国歌謡のひとつである「カチューシャ」は50以上のヴァリエーション、替え歌を生んだ。女兵士のカチューシャ、看護婦のカチューシャ、バルチザンのカチューシャ、あるいはカチューシャへの返事の歌等が戦場で歌われた。兵士たちは新型ロケット砲にまでカチューシャと名付けた。こんな替え歌も流行した。

抱いて、「カチューシャ」 フリッツよりきつく

ぼくらは嫉妬している 「カーチャ」にふさわしくない
ヒットラーもきみのことを恋しがっている
下司どもに向かってゆけ

狼の眼にアドルフを見ろ
強盗をかわいがれ やさしくしてやれ
死後の夜を彼に望ませよう
風で骨を撒き散らせ

ああ きみ「カーチャ」「カーチェンカ」 きみ
招かれざる客にご馳走しろ
ウクライナのガルーシキ（団子スープ）をやつらに食わせろ
モスクワのシチューを熱く煮えたぎらせろ⁽¹²⁾

アマチュアやプロの作曲家や詩人によって戦時中に1000以上の曲がつくられたが、1941年6月22日の独ソ戦開始から4日間だけでも100を越す歌がつくられた。詩の言葉の力が国民の気持ちを奮い立たせると信じられていたからである。⁽¹³⁾

国境や前線にいる兵士が故郷の恋人や妻を思う歌は特にたくさんつくられた。その中でももっとも有名なのがコンスタンチン・シーモノフ(1915-1979)が1941年の夏に書いた詩「俺を待っていてくれ」である。

俺を待っていてくれ 俺は帰ってくる
ただじっと待っていてくれ。
昨日のことは忘れて
黄色い雨が
哀しみを連れてくる日でも待っていてくれ
吹雪の日でも待っていてくれ
暑い日でも待っていてくれ

他の者たちが待てない日でも待っていてくれ。

俺を待っていてくれ 俺は帰ってくる
忘れてもいい時を
よく知っているすべての人に
よかれと祈らないでくれ。

俺がいなくなったのだと
息子や母に信じせておけ
友人たちには待ちくたびれさせておけ
炉辺に座らせて
追善のために
苦い酒を飲ませてやれ…
待っていてくれ。そして奴らと一緒に
飲み急がないでくれ。

俺を待っていてくれ すべての死の面当てに
俺は帰ってくる。
俺を待たなかった奴に
言わせてやる——「運がよかったね」と。
待たない奴らには分かりはしない
炎の中のように
自分を待っていてくれた
君が俺を救ってくれた。
どうやって俺が生き残るかを知ることになるのは
俺と君だけ——
他の誰でもない
君だけが待っていてくれるからこそ。⁽¹⁴⁾

これはシーモノフが恋人のヴァレンチーナ・セローヴァのために書いたごく個人的な詩だった。シーモノフが前線の塹壕の中でこの詩を口ずさんだところ、兵士たちはすぐさまこれを書きとめたり、暗記したりした。そして誰もがこの詩を自分のことのように感じ、シーモノフに詩を公表するようすすめた。1941年12月にこの詩を含めてシーモノフの何編かの詩がラジオで公表され、「プラウダ」にも掲載された。「俺を待っていてくれ」はすぐに反響を呼び、新聞各紙に何百回も繰り返し掲載され、多くの兵士と民間人の手で書き写されて巷間に流布した。少なくとも10人の作曲家がこの詩に曲をつけようとしたが、⁽¹⁵⁾結局1942年に先ほどの「カチューシャ」の作曲者ブランテルがこの詩の作曲をし、ゲオルギイ・ヴィノグラードフが歌い、これもたちまちヒットソングとなった。さらにシーモノフはこの詩をテーマにした映画シナリオを書き、1943年にはアレクサンドル・ストルペル（1907-1979）監督によって映画化された。この詩を書き写した兵士たちは、ポケットに入れて護符代わりにしたという。詩の文句を戦車やトラックに刻みつけたり、腕に刺青する兵士もいた。多くの兵士がこの詩を手紙に書き写して恋人に送り、娘たちもまた同じ詩の言葉を引用して返事を書いた。『『待っていてくれ』が大成功を収めた理由は、それが数百万人の兵士と民間人の個人的な心情を表現したからである。人々は愛する者との再会に生き延びる希望を託していた。[...]誰もが『待っていてくれ』の中に自分自身の詩的なロマンスが普遍的な言葉で表現されていると感じていた。この詩は戦争を背景にして描かれた『君と僕』の物語だった。』⁽¹⁶⁾

まったく個人的な感情から書かれた詩が公の個々の感情を代弁する言葉となった。戦時下の人々は自分の内心を代わりに語ってくれる詩を必要としていた。愁いに満ちたメロディーと共に歌われる詩は、離別の悲しみと死の恐怖、そして帰還と再会、生への希望を表現していた。勇ましい軍歌ではなく、こうした個人の心情を切々とうたう歌は、決して戦意を喪失させるものではないことに政治権力はすぐに気づき、個人の物語を母国（ロージナ）／国家の物語にすり替えることに成功した。「兵士がその戦闘能力を最大限に発揮するのは、何のために戦うのかを知っている時であり、自分自身の運命と戦争の目標を一体のものとして意識する場合である。[...]身近な対象への忠誠心ほど強力な動

機はない。『祖国ソヴィエト』ではなく、自分が属する特定の共同体、すなわち、実体を持つ人間的紐帯ネットワークを防衛する意欲が国防の大義と結びついた時、人々は自己を捨てて戦う決意を固めるのである。政府のプロパガンダはこの忠誠心を引き出すために、『ロージナ』という概念を持ちだし、その防衛を訴えた。」⁽¹⁷⁾

「俺を待っていてくれ」と同タイプの歌が大量につくられたが、中でも人気があったのが「暗い夜」である。映画「二人の兵士」(1942)の挿入歌として、ニキータ・ボゴスロフスキイ(1913-2004)が作曲し、ウラジーミル・アガトフ(1901-1967)が作詞した。1941年のドイツ・フィンランド軍の包囲下に置かれたレニングラード(現サンクト・ペテルブルク)の防衛戦線における二人の兵士の友情を描いた物語である。主演した俳優で歌手でもあるマルク・ベルネス(1911-1969)がギターを手に塹壕の中でこの歌を哀切に満ちた声で歌う。

暗い夜 弾丸だけが荒野をうなる
風だけが電線にうなり くすんだ星々が瞬く
暗い夜に愛する君が眠らずにいることを僕は知っている
子どものベッドのそばで君はそっと涙を拭う

君のやさしい瞳の奥を僕はどれほど愛していることか
その瞳に僕は今すぐ唇を触れたいよ！
暗い夜は愛する人を僕たちから引き離す
不安な漆黒の荒野が僕らの間に広がっている

君を信じている 親愛なる我が女友だちよ
この信頼が暗い夜 弾丸から僕を守ってくれた…
僕は嬉しい 決死の闘いにも心はおだやかだ
僕の身には何も起こらず 愛と共に君が僕を迎えてくることを僕は知っている

死は恐ろしくない そいつには一度ならずも荒野で出くわしたから
 ほら今も僕の上にそいつが飛び交っている
 君は僕を待っている 子どものベッドのそばで眠らずに
 だから僕には分かるんだ 僕には何も起こりはしないって！⁽¹⁸⁾

戦意高揚のための歌であれば、もっと勇ましく「敵を倒せ」というスローガンのようなものの方がよさそうなものだが、先述した通り、銃後の妻や家族を思い、「必ず帰るよ」、そのためには「絶対に死なないで、この戦争を終わらせるんだ」という強固な意志を表明するメッセージを打ち出すことで、かえって戦意を高揚させることになる。戦時下のソ連では「死に打ち勝つ」という、あくまでも楽観的な歌が人々の心をとらえたのであり、政治権力がそれを利用したので。こうして個人の内面の「声」は民衆すべての「声」となり、「戦争という物語」を共有することになったのである。

コンサートを前線へ

第二次大戦当時、日本でジャズが敵性音楽ということで禁止されたのとは反対に、ソ連ではレオニード・ウチョーソフ（1895-1982）やアレクサンドル・ツファスマン（1906-1971）も含めて、多くのジャズ・バンドは前線に慰問に訪れ、「戦いに勝利して、早く故郷に帰ろう」というメッセージを送ることで人気を博した。エディ・ロズネル（1910-1976）はグレン・ミラー・スタイルの本格的なアメリカ・ジャズで特に人気が高かった。ロズネルが1943年に録音した「セント・ルイス・ブルース」はヨーロッパにおけるジャズの歴史的な名演として今も高く評価されている。⁽¹⁹⁾

数万の音楽家、俳優、歌手、ダンサーたちが戦争に動員され、兵士の慰問のために4,000近くの移動演芸慰問団が組織された。その演目はクラシック音楽、バレエ、シェークスピア劇、ダンス、歌謡曲、ジャズ等々、さまざまなジャンルの芸能・娯楽であり、詩の朗読やセルゲイ・オブラスツォーフによる反ドイツ的な人形劇も人気があった。最前線の砲火の下でも上演されることは珍しく

はなく、観客が3人だけの時も3,000人という時もあった。3,720の部隊の慰問に、45,000人のアーティストが赴き、40万回を超すコンサートを前線で開催した。⁽²⁰⁾ 前線以外の開催地も含めると戦時下で行われたさまざまなコンサートは135万回にのぼった。⁽²¹⁾

こうした戦地でのコンサートのひとつを映画にしたのがアレクセイ・カプレル（1904-1979）監督の「コンサートを前線へ」（1942）であり、その映像から当時の大衆がどんな音楽を娯楽として求めていたかが分かるだろう。レニングラード前線でのアーティストたちの公演をカメラにおさめたものであるが、このコンサートの模様を取めた映画フィルムを前線に届け、それを兵士たちが鑑賞するという内容の映画である。司会を務めるのは兵士で映画技師役のアルカージイ・ライキン（1911-1987）で、有名なエストラダの喜劇役者だ。そしてコンサートの演目は、当時の流行歌手の歌、詩人の朗読、アクロバット、そしてウチョーソフのテア・ジャズ、つまり当時のエストラダのエッセンスのような内容となっている。⁽²²⁾

この映画でとりわけ興味深いのが二人の女性歌手リディア・ルスラーノヴァとクラヴジア・シュリジェンコ（1906-1984）の存在である。ルスラーノヴァはいかにもステレオタイプなロシアの田舎の女性を演じて、泥臭いまでに「ロシア」の善良なテーマをうたう。一方シュリジェンコは有名な「青いプラトーク」を歌っている。もちろんこれも愛国歌謡である。「青いプラトーク」（1942）はポーランド出身のイェジイ・ペテルブルスキ（1895-1979）作曲、ヤコフ・ガリツキイとミハイル・マクシーモフ作詞によるもので、大戦中だけでなく、今もよく歌われているソビエト歌謡の名曲である。

青い地味なプラトークが元気のない肩から落ちた
君は言った やさしい喜びに満ちた出会いを忘れないでと
君と別れたのは夜のことだった
あの時の夜じゃない！ 君はどこ 愛しい かわいい 故郷のプラトーク！
君の手紙を受け取ると 僕には故郷の声が聞こえる
行間から僕の目の前にまた立ち現れた青いプラトーク

夜明け前のひとときに僕は一度ならず夢を見た
プラトークの中の巻き毛 青い夜 乙女の眼の光

記憶に残る晩 君のプラトークがどんなふうに肩から落ちたのか
どんなふうに見送ったか 青いプラトークを心に留めると約束したか 思い
出す

故郷の愛しい人は今は僕のそばにいないけれど
君は愛とともに枕辺で泣いていることを知っている 青いプラトークよ

大切なプラトークを——何枚心に抱いたことだろう！
出会いの喜び 乙女の肩は激しい戦場のことを忘れない
彼らのため 故郷のため 愛する人のため あれほど愛しいもののため
大切な人の肩にあった青いプラトークのために機関銃を打つ⁽²³⁾

面白いのはルスラーノヴァの泥臭いロシアっぽさとは対照的にシュリジェンコは、フランスのシャンソン歌手のような雰囲気を漂わせながらうたうのだ。これは当時の大衆の音楽的好みを見事に反映している。どこにもないユートピアとしての古き良きロシアのイメージ（ルスラーノヴァ）、もうひとつのまだ見たことのない夢のヨーロッパのイメージ（シュリジェンコ）、自分たちの陽気な仲間というイメージ（ウチョーソフやライキン）がひとつのステージで一体となっているかのようである。

この映画の中でもっとも注目すべきはウチョーソフによるテア・ジャズの舞台だ。ウチョーソフは自分のオーケストラを率いて、前線から前線へと飛び回り、先述した「聖なる戦い」「カチューシャ」「俺を待っていてくれ」「暗い夜」、あるいは「君はいま遠く、遠く／僕らの間には雪、また雪…。／君のもとへ僕がたどり着くのは容易ではない／でも死までは——4歩」⁽²⁴⁾という歌詞で兵士たちの誰もが口ずさんだ名曲「壕舎の中で」(1942)等のヒットソングを歌った。しかし、ウチョーソフの面目躍如たるステージは「笑いは敵を殺す」という彼自身のモットーの通り、面白おかしい歌だった。その中でもっとも有名

なのが「フォン・デル・プシク男爵」である。⁽²⁵⁾

原曲はジャズのスタンダード・ナンバーとして知られている「Bei Mir Bistu Shein」(邦題「素敵なあなた」。ショロム・セクンダの1932年の曲)である。この曲は1937年にサウル・チャップリンがリフレンを加え、サミー・カーンが英語の歌詞を作り、コーラスグループのアンドリュウ・シスターズ録音のレコードをリリースして、アメリカでヒットした。ベニー・グッドマンやグレン・ミラーも演奏した。ロシアではウチョーソフが「僕の美人さん」という題で1940年に録音した。ヤコブ・スコモルフスキイ(1889-1955)指揮のレニングラード・ジャズ・オーケストラの演奏だった。アップテンポでいかにもジャズらしい軽快なこの曲は、ウチョーソフ自身によって2つのヴァリエーションが作られた。これらは他愛のないラブソングだったが、さらに、1942-43年にアナトーリー・フィドルスキイ作詞の替え歌「フォン・デル・プシク男爵」がつくられ、ウチョーソフが十八番として戦地で歌った。「フォン・デル・プシク男爵／ロシアの脂身を奪おうと／ずっと前から決めて 考えていた。／彼はたいへんな派手好きで／不自由な思いには慣れていなかったし／自己犠牲的行為を早くから叫んでいた。／彼がスターリングラードで何をしたとか／彼はパレードでこうしたとか／ラジオで怒鳴る／そして彼は脂身を食らう。／彼は何を食い、飲むのか／だが脂身は／大ボラ吹きに差し出される！／フォン・デル・プシク男爵／ロシアの銃剣のことを忘れていた／銃剣は男爵を打つことを忘れはしなかった。／そして雄々しいフォン・デル・プシクは／ロシアの銃剣の上に倒れた——／ロシアではなく、ドイツ人が脂身になったのだ。／ベルトのない軍服／かぎ十字は打ち碎かれた。／さあ ロシアの銃剣に／入り込んでみなよ！／フォン・デル・プシク男爵／さあ おまえの以前の脂身はどこだ？／男爵に残されていたのは銃剣だけだ！／一卷の終わりだ！」⁽²⁶⁾ これらの曲はラジオや「コンサートを前線へ」でも流れ、戦意高揚に一役買ったことは言うまでもない。

もうひとつ、ウチョーソフらしい歌を取り上げたい。「おまえはオデッサ人だよ、ミーシカ」である。1941年の終わりにウラジーミル・ドゥイホヴィチヌイ(1911-1963)の詩「オデッサ人ミーシカ」が新聞に掲載された。当時オデッサ

の映画スタジオの音楽部門で司会の仕事をしてきたモデスト・タバチニコフ(1913-1977)がこれにすぐに曲をつけた。オデッサ出身のレオニード・ウチョーフが彼の指揮する国立ジャズ・オーケストラでこの曲を歌った。彼は1943年3月25日、この曲をモスクワでレコード録音した。録音では3分ほどの曲だが、ステージで歌うともっと長い曲である。

広い潟 緑の栗の木
空色の停泊地に平底船がゆれている。
ベッピンさんのオデッサで貧乏な少年は
幼いころから本物の水兵と認められていた。
もしもひどい辱めが
少年を苦しめ始めると
少年は顔にも浮かべないが
顔に出そうになると 母は彼に言うのだ

* 「おまえはオデッサ人だよ ミーシカ それはつまり
おまえには悲しみも不幸も怖くないということさ。
だっておまえは水兵だろ ミーシカ 水兵は泣いたりしないし
みなぎる元気を決してなくしたりしないんだよ！」

広い潟 かしげた栗の木
ベッピンさんのオデッサは敵の砲火の下。
水兵服の若い男の子が 熱い機関銃とともに
疲れも知らず 当直に立っている。
そしてその夜も 昨日と同じように
うなり声と砲撃の音が聞こえてくる。
少年は怖くない
怖くなったら 彼は自分に言うのだ

* (くりかえし)⁽²⁷⁾

オデッサ出身のウチョーソフがうたうこの歌は、たちまち一種のフォークロア、あるいはオデッサ神話となった。⁽²⁸⁾次に引用する続きの歌詞が「ミーシカ、オデッサに帰る」と題して「コムソモーリスカヤ・プラウダ」紙に掲載されたのは1944年4月である。おりしも同年3-4月、オデッサはドイツ占領下にあり、「おまえはオデッサ人だよ、ミーシカ」の歌詞が印刷された紙がオデッサ上空を飛ぶ飛行機からばらまかれたという。

広い潟 花咲く栗の木
しっかりとした足取りで親衛大隊が
ベッピンさんのオデッサに戻ってきた時
横隊散開して旗たちのはためく音が再び聞こえてきた。
そしてバラの地面に立つと
帰還の旗に
我らがミーシカは不意の涙をこらえられなかったが
誰も彼に何も言わなかった

たとえオデッサ人のミーシカでも つまり
彼には悲しみも不幸も怖くはないとしても
たとえおまえが水兵で ミーシカ 水兵は泣かないとしても
でも今だけは泣くのが本当だよ 不幸なんかじゃない!⁽²⁹⁾

1945年5月2日、ベルリンは陥落した。戦勝国であるソ連では、また多くの歌がつくられ、歌われたが、それはまた別の物語である。ともあれ、ジャズと大衆歌謡が戦時下のソ連で個と公が一体となって声となったことは確かなことであった。しかし、戦後まもなく、これらの声は再び封殺され、独自の音楽文化を形成することになるのである。

注

- (1) R. Stites, *Russian popular culture. Entertainment and society since 1900*. Cambridge University Press. 1992. p.75.
- (2) Луначарский А.В. О джаз-музыке. *О массовых празднествах, эстраде и цирке*. М.:Искусствл, 1981. С.269.
- (3) Соллертинский С. Несколько слов о джазе / Эстрада без парада: Сборник /Сост. Баженова Т. П. –М.: Искусство, 1990. С.106
- (4) J. Geldern, R. Stites (eds), *Mass Culture in Soviet Russia*. Indiana University Press. 1995. pp. 318-319.
- (5) *Ibid.*, pp. 340-341.
- (6) *Ibid.*, pp. 316-317.
- (7) *Песни, опаленные войной: Страницы песенной летописи Великий Отечественной* / Сост. Ю. И. Бирюков. -М.: Русский импульс, 2011. С.46-47.
- (8) J. Geldern, R. Stites, *op. cit.*, pp.315-316.
- (9) R. Stites, 'Frontline Entertainment' in R. Stites (ed.), *Culture and Entertainment in Wartime Russia*. Indiana University Press. 1995. p.132.
- (10) Сквозников В. По поводу одного абзаца (О массовой песне 30-х годов). *Вопросы литературы*. 1990, №8. С.21.
- (11) Hans Gunther, "'Broad is my Motherland" The mother archetype and space in the Soviet mass song' in E. Dobrenko, E. Naiman (eds.), *The landscape of Stalinism : The art and ideology of Soviet space*. University of Washington Press, 2003. p.89. 高橋健一郎は「カチューシャ」について「この歌もやはり《教育の物語》あるいは《戦争の物語》という「ソビエト語」の国家的な物語の枠から決して逃れられてはいない」と指摘している。(高橋健一郎『ソビエト語』の言説空間——1930年代の大衆歌をめぐって)「現代文芸研究のフロンティア (VII)」北海道大学スラブ研究センター, 2005年。164頁)
- (12) J. Geldern, R. Stites, *op.cit.*, p.316. 戦地で歌われた有名な替え歌だけでも11のヴァリエーションがあり, 次のサイトで読むことができる。
<http://a-pesni.org/ww2/oficial/katjucha.php?q=a-pesni/ww2/oficial/katjucha.php> (2016年1月18日閲覧)
- (13) R. Stites, *Russian popular culture*. p.103.

- (14) Поэзия периода Великой Отечественной войны и первых послевоенных лет / Сост. В. М. Курганова. -М.: Сов. Россия, 1990. С.46-47.
- (15) R. A. Rothstein, 'Homeland, Home Town, and Battlefield' in R. Stites (ed.), *Culture and Entertainment in Wartime Russia*. p.85.
- (16) オーランドー・ファイジズ『囁きと密告——スターリン時代の家族の歴史』(下) 染谷徹訳, 白水社, 2011年。137頁。
- (17) 同上, 169頁。
- (18) J. Geldern, R. Stites, *op. cit.*, pp.377-378.
- (19) S. Frederick Starr, *Red and Hot; The Fate of Jazz in the Soviet Union 1917-1980*. New York, Oxford, Oxford University Press, 1983. pp.194-195.
- (20) R. Stites, *Russian popular culture*. p.109.
- (21) David MacFadyen, *Songs for Fat People; Affect, Emotion, and Celebrity in the Russian Popular Song, 1900-1955*. Montreal & Kingston, McGill-Queen's University Press, 2002. p.126.
- (22) *Русская советская эстрада*. 1930-1945 гг. -М.: 1977. С.396. ネーヤ・ゾールカヤ 著, 扇千恵訳『ソヴェート映画史——七つの時代』ロシア映画社, 2001年, 266頁。
- (23) J. Geldern, R. Stites, *op. cit.*, pp.334-335.
- (24) Любимые песни и романсы. -Челябинск: «Урал Л.Т.Д.», 2001. С.150. *Гейзер М.* Леонид Утесов. -М.: Молодая гвардия, 2008. С.197-214
- (25) *Гейзер М.* Леонид Утесов. -М.: Молодая гвардия, 2008. С.197-214.
- (26) *Сафошин В.* Леонид Утесов. -М.: Эксмо, 2005. С.379-380.
- (27) *Песни, опаленные войной*. С.75-77.
- (28) Утесов / *Увалова Е.Д. (Ответ.Ред.)* Эстрада в России. XX век. Энциклопедия. -М.: «Олма-Пресс», 2004. С.684.
- (29) *Песни, опаленные войной*. С.77-78.